

## 小学校「特別の教科 道徳」における病気の児童への指導の成果と課題

—— 心理的な支援を視野に入れて ——

青木 利樹\*・田中 亮\*\*・大井 雄平\*\*\*・奥住 秀之\*\*\*\*・小林 巖\*\*\*\*\*

(2020年11月25日受理)

AOKI, T., TANAKA, R., OI, Y., OKUZUMI, H. and KOBAYASHI, I.; Achievements and Challenges in the Teaching of the Special Subject “Morals” to Children with Health Conditions in Elementary School and Regular Classes: *With an Outlook on Psychological Support*. ISSN 1349-9580

In recent years, many children with health conditions have been enrolled in regular elementary school classes. Among them, the special subject of morals has been established, and there is an increased need for support for children with health conditions. This study examines the achievements and challenges in supporting children who are in poor health and physically weak during the subject of morals in their regular elementary school classes. We conducted semi-structured interviews about the achievements and challenges of teaching morals to children with health conditions with current and former regular elementary school homeroom teachers who have experience teaching such children. Regarding the achievements with the children, there were improvements in “obtaining sympathy” and “obtaining participation” for children with health conditions, and “increasing learning efficacy” for the classes and schools. Regarding the achievements with the parents, we obtained answers corresponding to “encouraging acceptance of the disease” and “encouraging understanding of the disease.” Regarding the challenges, we received answers related to “challenges particular to children with health conditions” and “general challenges with moral education.” Up until now, the focus has often been on children with developmental disabilities, but it is important to consider comprehensive support for children with illnesses and disabilities advanced by an inclusive education and a symbiotic society.

KEY WORDS : Special subject of “morals,” Education for poor health, Elementary school

\* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

\*\* *Shiojiri east elementary school*

\*\*\* *Tokoha University*

\*\*\*\* *Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University*

\*\*\*\*\* *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*

---

\* 東京学芸大学教職大学院  
\*\* 長野県塩尻市立塩尻東小学校  
\*\*\* 常葉大学  
\*\*\*\* 東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座  
\*\*\*\*\* 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター

## 1. はじめに

近年、小児医療はめざましい進歩を遂げ、入院の短期化・頻回化、治療方法の複雑化が生じている。それに伴い、病気の児童の学ぶ場や学習形態も多様化が進んでいる。従来、病気の児童の学びの場は、病弱特別支援学校、病弱・身体虚弱特別支援学級を主体としながら、疾患の状態によって、病院に併設された学校での小集団指導や病院内に設置された教室での個別指導、ベッドサイドでの訪問指導などの指導形態で行われていることが多かった(全国特別支援学校病弱教育校長会, 2020)<sup>18)</sup>。一方、現在では、退院後に地域の通常の学級に復学し、通院治療や体調管理をしながら学ぶケースが非常に増えている傾向にある(丹羽, 2017)<sup>8)</sup>。実際に、小児慢性特定疾患患者の約85%の児童・生徒が地域の小・中学校に通学しているという報告もあり(青地・宮井, 2016)<sup>1)</sup>、小学校の通常の学級における学習指導・心理的支援の充実が求められている(田中 a, 2020)<sup>11)</sup>。

ところで、病気の児童が多く学ぶようになった小学校教育全体を見渡すと、学習指導要領の改訂に伴い、その指導法改善や教育課程編成も大きく変化しつつある。とりわけ、本稿では、2018年学習指導要領改訂により、「特別の教科 道徳」(以下、道徳科)として教科化された道徳学習について見ていくこととする。

道徳科は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことを目標に、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育の要とされている(文部科学省, 2018)<sup>5)</sup>。これについて、特別支援教育の視点から考えると、学習障害や注意欠陥多動性障害等のいわゆる知的な遅れのない発達障害等のある児童の、困難やその配慮については「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」(文部科学省, 2016)<sup>7)</sup>で教科化に先立ち検討されており、「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」にも「困難さの状態」を把握した上での必要な配慮を行うよう記述されている(文部科学省, 2018)<sup>6)</sup>。

しかし、病気の児童、病弱・身体虚弱児童への支援については、通常の学級にそうした児童が一定数在籍するという現状にもかかわらず、その記述はなされていない(文部科学省, 2018)。発達障害児及びその傾向のある児童に対する道徳科で行われている支援の現状と課題についてはすでに検討がなされているが(青木ら, 印刷中)<sup>3)</sup>、病弱・身体虚弱児童への支援の現状についての検討は十分には行われていない。先行研究でも、病弱・身体虚弱に関する内容が検定教科書の中で教材として扱われることは多く、「生命の尊さ」の内容項目を理解する

ことにつながりやすいとしながらも、病弱・身体虚弱に関する知識が教師に必要であること、また、学級内の児童、家族の病気に関する既往歴等を考慮することの重要性が報告されている(田中・奥住・平田, 2020)<sup>13)</sup>。以上、道徳科の授業についても病弱・身体虚弱のある児童への支援が求められていると言えよう。

本論では、小学校の通常の学級における道徳科の時間での病気の児童への支援の成果と課題について試行的に検討する。

## 2. 方法

### 2. 1 調査参加者と調査手続き

病気の児童を担当している、あるいは、かつて担任した経験のある小学校の通常の学級の教職員13人が参加した。

調査参加者の所属する学校長に研究の趣旨を伝えて、協力を依頼し、調査参加者本人の承諾を得た上で、半構造化面接を行った。調査期間は20XX年9月下旬から10月中旬までであった。

### 2. 2 調査内容

調査項目は(1)「病気の児童に道徳学習を行ったことの成果はどのようなものがありますか」(2)「病気の児童に道徳学習を行う上での課題はどのようなものがありますか」である。参加者の口頭による回答を本稿第一筆者及び第二筆者が記録した。

### 2. 3 分析方法

調査後、文章の意味が変わらないことに留意して、回答内容ごとに区切り、集積された回答をそれぞれの調査項目内で類似したものごとに分類した。

「病気の児童に対する道徳学習の成果」については、その対象を「児童」と「保護者」とで分類し、さらにそれぞれを「病気の児童本人」と「学級・学校」, 「本人の保護者」と「本人以外の児童の保護者」と分類した。「児童」「保護者」に分類できないものは「その他」に分類した。「病気の児童に対する道徳学習の課題」は、「病気の児童特有の課題」と「道徳教育全体に関わる課題」とに分類した。

## 3. 結果

### 3. 1 成果

表1は「病気の児童に対する道徳学習の成果」についての回答を示している。まず、成果の対象が「児童」と

表1 病気の児童に対する道徳学習の成果

( ) 内は人数

成果の対象	カテゴリ	回答内容
児童	病気の児童本人	院内学級に実際に通っていたから、現実的な問題として本人が捉えられる (10)
		共感性の獲得 本人にとって、題材と共感できることで自己肯定感が向上できた (5)
		本人にとって、同じような思いをしている人がいることが理解できた (3)
	学級・学校	当事者性の獲得 本人にとって、周りの人たちがどう思っているのかを理解するきっかけとなった (3)
		学習効果の向上 病気の子どもが自分のこれまでの経験を肯定的に受け止めるきっかけになっていた (2)
		友達が院内学級に実際に通っていた経験から、現実的な問題として学級全体で捉えられる (8)
保護者	本人の保護者	生命の尊さの学習により現実味が増す (5)
		学級の他の子どもたちにとっても、自分事として捉えられた (3)
	本人以外の児童の保護者	人権週間で取り上げ、全校で命について考えるきっかけとなった
		病気受容の促進 周りに理解してもらえて病気の子どもへの保護者が喜んでいて (5)
その他	病気理解の推進	病気の子どもへの保護者が自分のこれまでの経験を肯定的に受け止めるきっかけになっていた (3)
		道徳学習の発展で全校の保護者に人権講演会で啓発を行うことができた 世の中には病気の人がいるということを知るきっかけになった
その他		特になし

表2 病気の児童に対する道徳学習の課題

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	回答内容
病気の児童特有の課題	内容	心理的課題	人が亡くなる話のときは、本人の気持ちを考えると扱いにくい (6)
			院内学級が題材となる話には、実際に通っていた本人の気持ちを考えると扱いにくい (5)
			病気の児童は道徳学習に積極性がもちにくい (4)
			本人に了承を得ることに時間がかかる (3)
			保護者の了承を得ることに時間がかかる (3)
	授業方法	授業展開	本人と周りの子どもにとって、資料の価値が全然違うのではないかと 本人・保護者への体験談の教材化につなげていきたいができない (5)
			授業への集中が続かない (2)
			指導書に病気の子どもがクラスにいるときにどうしたらいいのか専門家の見解を書いて欲しい
			病気の児童への指導に参考のできる指導案がない
			生命の尊さについて、病気の児童と他の児童の評価を同じにしているかどうか わからない (2)
道徳教育全体に関わる課題	授業方法	評価	時間 通院による欠席のために週1回の道徳が抜けることがある (5)
			授業展開 映像資料の活用ができにくい
		時間	道徳教育全体において評価の具体がわからない
			年間標準時数の確保が難しい (5)

「保護者」とに分類された。「児童」はさらに「病気の児童本人」に関わるものと「学級・学校」に関わるものに分類された。「病気の児童本人」への成果については、「共感性の獲得」、「当事者性の獲得」に関する回答が得られた。「学級・学校」に関わるものとして「学習効果の向上」が挙げられた。「保護者」は「本人の保護者」に

関わるものと「本人以外の児童の保護者」に関わるものに分類された。「本人の保護者」への成果については、「病気受容の促進」に関する回答が得られ、「本人以外の児童の保護者」への成果については、「病気理解の推進」に関するものが得られた。「児童」、「保護者」の両方に分類できない「その他」としては、「特になし」という回

答が得られた。

### 3. 2 課題

表2は「病気の児童に対する道徳学習の課題」についての回答を示している。まず、「病気の児童特有の課題」と「道徳教育全体に関わる課題」に分類された。「病気の児童特有の課題」はさらに「内容」に関するものと「授業方法」に関するものとに分類され、「内容」の課題については、「心理的課題」に関する回答が得られ、「授業方法」の課題については、「授業展開」「評価」「時間」に関する回答が得られた。一方、「道徳教育全体に関わる課題」は「授業方法」に関する回答が得られ、その内容は「授業展開」と「時間」に関するものであった。

## 4. 考察

### 4. 1 直接的成果としての心理的基盤の涵養

「小学校学習指導要領（平成29年告示）」の「第1章 総則」において、学校教育全体を通して行われる道徳教育の目標は「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」と記述されており、道徳教育で道徳性を養うことは自立した人間の心理的基盤を養うことに繋がる（文部科学省，2018）。本研究においては、道徳教育の要となる道徳科の成果として、病気の児童が現実の問題として捉えられることや、これまでの経験を肯定的に受け止めるきっかけになったという回答が得られた。これらのことから、病気の児童の自立への基盤を養うことに繋がったと推察できる。病弱教育の意義については、平成6年、文部省「病気療養児の教育に関する調査研究 協力者会議」により、（1）積極性・自主性・社会性の涵養（2）心理的安定への寄与（3）病気に対する自己管理能力（4）治療上の効果等の4点が挙げられ、現在も、教育課程編成や指導・支援の基盤とされている（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，2017）<sup>4)</sup>。このような基盤のもとに、病気の児童に対する道徳教育が成り立つことが考えられ、特に、（1）積極性・自主性・社会性の涵養（2）心理的安定への寄与につながりうる成果が挙げられていることが示唆される。

### 4. 2 間接的成果としての学習効果の促進

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」の「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い」において、地域の人々や団体等外部人材を招き、実体験に基づいて分かりやすく語ってもらう機会を設けることは効果的であると記述されている。また、児童に

とって身近に感じられる教材は、教材に親しみながら、ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができることとされている（文部科学省，2018）。本調査で他の児童がより現実的な問題としてそして自分事として捉えられたとみなしうる回答が得られたことは、他の児童にとって病気の児童が身近な存在であることに起因すると考えられる。病気の題材が扱われる道徳的価値項目の授業を行う際に、病気の児童本人の「考え」を聞くことは、他の児童の道徳科の指導においても意義があると推察される。

### 4. 3 保護者に対する効果

田中（2014）<sup>17)</sup>は、自閉スペクトラム症の医学的診断を受けた子どもをもつ保護者に対する調査から、保護者を支える社会的支援の1つとして理解者を増やすことを報告している。本研究では、「周囲の理解を得られたことに喜びを感じた」や「これまでの経験を肯定的に捉えられるようになった」という回答が得られており、病気の児童をもつ保護者にとって、理解者が多いことが社会的支援として重要であることが示唆され、病気の児童をもつ保護者への心理的な支援が必要であるとする田中（2020a）の指摘と重なりが見られる。

また、芝田（2013）<sup>9)</sup>は、障害理解教育は保護者・家族への啓発が成果につながるとしており、このことは、障害理解に関する授業の実施後、同内容に対して適切に保護者・家族への啓発を行うことの重要性と障害理解教育における道徳の重要性を指摘している。本研究では、道徳科の指導のあとに全校の保護者に対して啓発を行ったという回答が得られており、病気の児童を含む学級や学校への道徳科の指導が障害理解の促進につながる可能性のあることが示唆された。

### 4. 4 実践上の課題

病気の児童の特有の課題として「内容」に関する課題が挙げられ、人の死を取り上げる内容や院内学級に関する内容は、児童本人の気持ちを聞いてからではないと扱いにくいという回答が得られた。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」には「主たる教材として教科用図書を使用しなければならない」と記述されており、学級に病気の児童がいる際にも定められた教材を扱う必要があるが、その際には十分な教材の研究を行い、細心の注意を払って扱われることが必要であろう。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」において「家族愛、家庭生活の充実」には「多様な家族構成や家庭状況があることを踏まえ、十分な配慮を欠かさないようにすることが重要で

ある」としている(文部科学省, 2018)。一方、「生命の尊さ」には配慮事項の記述はなされていないが、本調査でこのような回答が得られたことは病気のある児童への心理的支援の必要性を示唆していると言えよう。道徳科での発達障害児への支援の課題についての先行研究を見ると(青木ら, 印刷中), ICT教材の使用や授業展開などの方法論についての回答が多く、心理的支援の必要性は病気のある児童の特有の課題と言えるだろう。

また、特有の課題として「授業方法」に関するものが挙げられ、参考となる指導案がないことや指導書に病気の児童がいるときの授業の進め方についての記述が必要という回答が得られた。このことは、「病気」が「生命の尊さ」の教材で扱われることが多いにも関わらず、病弱・身体虚弱教育全般や病院内学級を正しく理解している教員が少ないことや(副島, 2018)<sup>10)</sup>、田中・奥住(2020)<sup>15)</sup>が様々な視点から病気の児童の支援について教職員が学ぶ機会を増やす必要性を指摘していることと関連すると思われる。

## 5. まとめにかえて

本研究では、病気の児童に対する道徳学習の成果と課題について調査、検討を行った。その結果、病気の児童に直接的にかかわる成果として、道徳性の涵養はもちろん、心理的な発達の促進に関する効果も考えられた。加えて、病気の児童にかかわる間接的成果として、病気の児童の在籍する学級や学校全体についても道徳的価値や病気理解について深める機会となるという結果が得られた。保護者に対しても同様の成果があることが考えられ、道徳科で「生命の尊さ」等で病気について扱われることで周りの人の理解を得ることが、病気の児童の保護者の心理的支援につながることを示唆された。

通常の学級における特別支援教育は知的障害児の支援(田中・奥住・大井, 2020)<sup>14)</sup>や発達障害児の支援を中心に考えられることが多く(田中・奥住, 2019)<sup>16)</sup>、道徳についても発達障害児の特性との関連についての検討が行われている(青木・田中・奥住・大井, 2020)<sup>2)</sup>。しかし、入院の短期化・頻回化の傾向が高まる中で、多くの病気の児童が、通常の学級に在籍するようになった現在では、病気の児童の指導・支援も積極的に検討していくことが重要だろう。とりわけ、新しく教科化され、指導方法の充実が叫ばれる道徳科においては、病気の児童に対する指導・支援の成果と課題に着目した指導・支援方法の充実はより一層求められてくる。

道徳科の教材においては、多様な障害が取り上げられていることはすでに確認されている(田中, 2020b)<sup>12)</sup>。

「家族愛, 家族生活の充実」等の教材で多く取り上げられている聴覚障害, 「親切, 思いやり」「希望と勇気, 努力と強い意思」等の教材で扱われる視覚障害, そして肢体不自由の児童に対する道徳科の支援も考えていく必要があるだろう。道徳教育は、道徳科の時間のみならず、教育活動全体を通して行われるものであることから、他の教科や生活指導そして学級経営の中でも、道徳教育の観点から病気や障害のある児童に対する総合的な支援を考えていくことが重要であろう。

また、本調査の実践上の課題として道徳科の授業展開や評価、時間数など道徳教育全体に関する回答が得られた。これらは、病気や障害の問題との関連を考えつつ、道徳科の全体の問題として別に調査を行う必要がある。

最後に本研究の限界性としては、今回の調査・検討は、小学校における病気の児童の道徳学習という先行研究の少ない内容を取り上げており、今後の研究の基盤となることを目的として行われた。今後はさらに調査対象を拡大するとともにKJ法やテキストマイニング等を利用して、統計的な傾向をつかみ、より精度をあげることが考えられる。

## 付記

本研究にご協力いただいた教職員のみなさまに記して感謝の意を表します。

## 文献

- 1) 青地由梨奈・宮井信(2016) 通常学級に在籍する慢性疾患児における学校適応感とライフスキルとの関連日本衛生学会誌, 71, 216-226
- 2) 青木利樹・田中亮・奥住秀之・大井雄平(2020) 小学校「特別の教科道徳」におけるLD等発達障害児の特性・困難と配慮・支援—「教育支援資料」と小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」との関連— 教育研究実践報告誌, 4 (1), 19-26
- 3) 青木利樹・田中亮・奥住秀之(印刷中) 小学校「特別の教科道徳」における発達障害児及びその傾向のある児童への指導上の工夫・配慮. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 72
- 4) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2017) 病気の子どもの教育支援ガイド. ジアース教育新社.
- 5) 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示)
- 6) 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説特別の教科道徳

- 7) 文部科学省 (2016) 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議. 「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について (報告)
- 8) 丹羽登 (2017) 小児医療の進歩に伴う病弱教育の変化と課題. 教育学論究, 9 (2) 191-192
- 9) 芝田裕一 (2013) 人間理解を基礎とする障害理解教育のあり方. 兵庫教育大学研究紀要, 43, 25-36
- 10) 副島賢和 (2018) 病気の子どもへの教育における大きな課題. 教育と医学, 66 (8), 700-706
- 11) 田中亮 (2020a) 病弱教育の現代的な課題と専門性. SNEジャーナル, 26 (1), 27-43
- 12) 田中 亮 (2020b) 小学校・特別の教科道徳における「障害」を扱う教材. 未来を拓く教育実践学研究, 4, 140-149
- 13) 田中 亮・奥住秀之・平田正吾 (2020) 小学校の道徳科における肢体不自由児・者に関連する教材の一考察—教科書を中心とした指導法の改善及び教育課程編成に向けて—. 千葉大学教育学部研究紀要, 68, 241-246
- 14) 田中亮・奥住秀之・大井雄平 (2020) 小学校の通常の学級における知的障害児の指導・支援と教育課程編成の実践. 教育研究実践報告誌, 3 (1), 11-20
- 15) 田中 亮・奥住秀之 (2020) 都道府県及び核市の教職員研修センターにおける病弱教育に関する研修の実施状況—指導法改善や教育課程編成に向けた郊外研修の在り方—. SNEジャーナル, 26 (1), 162-175
- 16) 田中亮・奥住秀之 (2019) 小学校の通常の学級における特別支援教育の推進. 東京学芸大学総合教育科学系紀要, 70 (1) 383-392
- 17) 田中富子 (2014) 保護者の障害受容に影響を与える要因—社会的支援を視点とした分析. 吉備国際大学研究紀要. 医療・自然科学系, (24), 43-54
- 18) 全国特別支援学校病弱教育校長会 (2020) 特別支援学校学習指導要領等を踏まえた 病気の子どものための教育必携. ジアース教育新社